

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)＋(Enterキー)です。〕

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開所より地域との連携の中で「人権を大切に・共に喜び合える・信頼の介護」を理念としてきた。玄関ホールに掲げてあり職員は目にする機会が多い他、パンフレットの表紙にも載せている。理念の実践に向けて職員は介護目標を立て、活動に取り組んでいる。	理念は玄関ホールに掲示し、共有と実践に繋がっている。また、パンフレットの表紙に載せるとともにホームページにも理念を載せて、介護方針を明確にしている。職員は理念の持つ意味を良く理解して日々の支援に取り組んでいる。また、月1回のスタッフ会議の中で掲げた「介護目標」に対しての問題点を話し合って意思統一を図っている。家族に対しては利用契約時に理念について説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設の庭は、オープンガーデンとして開放している。新型コロナウイルス感染対策をして昨年は、恒例のサン祭りを開催した。今年は、敬老会や七色祭(ミニ運動会)にご家族やボランティア、区長、民生児童委員、地域の方々との交流を深めることが出来た。	開設以来法人として区費を納めて、地域の一員として活動している。地域の行事は殆どが再開されていないが、当ホームで行う「七色祭」「敬老会」「クリスマス会」等の行事には区長さん、民生委員、地域の皆さんに参加していただき交流を深めている。また、生涯学習センターと連携を図って、中学生、高校生、専門学校の職場体験の受け入れを進めている。また、社協からも職場体験受け入れの依頼がある。更に、敬老の日等に合わせて「三味線演奏」「フォークダンス」等のボランティアの来訪が再開した。今後は、近隣の「保育園」との交流活動も検討している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	サマーチャレンジ、ボランティアの受け入れ、出前講座への登録をしている。依頼を受けて、地域の方々に認知症の理解・支援の方法を学んでいただいた。また、初任者研修の実習生の受け入れなど行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	併設の小規模多機能ホームと合同で年6回実施して、利用者の状況や行事の様子を報告をしている。サン祭り・敬老会・避難訓練に参加して頂き、行事を通じて活動の実際を知っていただくようにしている。また、毎月発行のサン便りに掲載する「にやりほっとは」好評をいただいている。	運営推進会議は、家族代表、地域包括支援センター職員、民生児童委員、小規模多機能居宅介護支援事業所職員、グループホーム職員、理事長が出席して、併設の小規模多機能居宅介護支援事業所と合同で開催している。利用者状況、事故ヒヤリハット報告、行事報告、職員関係、意見交換等を行って、サービスの向上に繋がっている。また、運営推進会議に合わせ敬老会等の行事を開催して利用者の生活の様子を見ていただいている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	施設の待機者数の報告や事故報告をしている。入居者を受け入れる際の情報提供を受ける事もあった。また、困りごとや分からないことはその都度相談して意見を頂いている。介護相談員の訪問時には情報提供をしている。	市高齢者福祉課には事故ヒヤリハット報告等を速やかに行うとともに様々な事項について相談している。また、市の介護相談員2名が4ヶ月に1回来訪して、利用者と面談するとともに気付いた事項の報告を口頭で受けて、日々の支援の参考になっている。介護認定更新は調査員がホームに来訪し、ケアマネージャーが中心に対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体的拘束適正化委員会を年4回、研修を2回開催している。身体拘束について職員は学ぶ機会を持ち、日常的にケアを振り返る機会を持っている。施設の玄関は施錠をしないで開放している。また、ベットにより危険と判断する時は、家族の理解を得てベットの使用を止めている。ケアの大変さはあるが、安全を第一に、拘束をしないケアに取り組んでいる。	ホームとして身体拘束の無い支援に取り組んでいる。転倒危惧の有る利用者が数名おり、家族と相談の上で、人感センサーを使用している。また、若干名が夜間ベットより落下危惧があるので、ベットの使用を止めて、マットレスを使用している。身体拘束適正化委員会を3ヶ月に1回開催するとともに身体拘束・虐待防止の研修会を年に2回行って拘束に対する意識を高めて支援に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年2回の研修に取り組んでいる。職員は虐待について、日々のケアの中で注意し合い、改善に向けて話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を活用している利用者・家族との関わりを通じて学ぶ機会があった。制度を利用する家族の希望に応じ協力してきた。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の締結の際は、契約内容と重要事項の説明、施設の理念の説明を行っている。入所にあたり家族の要望や不安なことを確認している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族や利用者の希望があれば、新型コロナウイルスの感染対策をして面会や外出を支援している。また、重症者の家族の付き添いの実現に協力しながら看取りを支援した。職員は話し合いを持ちながらその時々で必要な支援を実施している。	コロナ禍中は家族との関わりも制約があったが、新型コロナ5類移行後は、感染対策を取った上で、コロナ前の状態に戻すように活動している。面会は事前に予約を受けるなどして、ホールに於いて15分位を目安に行っている。また、今年よりホームの行事である「誕生日会」「七色祭」「敬老会」「クリスマス会」等に家族も参加していただいて、利用者と楽しいひと時を過ごしている。電話やメールを用いて、きめ細かく家族との連携を図ると共にホームでの生活の様子を毎月発行している「サンだより」で知らせている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	代表者・管理者は業務に共に当たり、日常的にすべての職員と話す機会があり、提案や意見を積極的に受け入れている。また、毎月実施しているスタッフ会議では、活発に意見交換が出来、業務の改善につなげている。	スタッフ会議を月1回行っており、行事の計画・報告・反省や各種研修及び問題点の話し合っ、日々の支援の向上、業務改善に繋げている。合わせて毎月月末にカンファレンスを行い、利用者個々の状況把握に努めている。また、職員は、年度末に自己評価を実施して、新たな年間目標を立て、業務にあたっている。理事長との面談の機会もあり、意思疎通を図っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、職員の得意なところで活動できる機会を設け、～係手当として反映している。資格手当など勤務体系の見直しをして資格取得への意欲向上につなげている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は、すべての職員に研修を受けることを勧めている。希望する研修があればそれを優先している。認知症介護実践者研修へ受講を勧めて資格の取得に協力している。それらの研修を報告する機会があり、すべての職員は学びを共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表者は、県や市で行っている連絡会議などに参加している。職員は実践者研修などを受講して同業者との交流の機会がある。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスの導入前には訪問の機会を持って顔なじみの関係を築くことに努めている。利用者が安心して生活がスタートできるように、対応に努めている。利用者の不安事は話す内容や表情からも理解するようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用者・家族が共に納得して施設入所出来ることは、その後の利用者の生活に大事なことを理解して頂いている。利用にあたり、家族への不信任や不安を話す利用者がいた。家族の意向を十分理解して、家族と協力しながら利用者の安心を支援している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の意見や要望は記録に残している。職員はカンファレンスで必要な支援について話し合っている。ありのままを記録に残して、利用者と家族が望む生活に近づけられるように、意見や要望は最大限サービスに反映している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は利用者と共に過ごす歳月の中で、支えられ教えられることが多いことを知っている。利用者のありがたい一言に、その笑顔に支えられていると感じている。「にやりほっと」の取り組みから、利用者の喜びや楽しさを共感することが出来た。職員は感謝の気持ちを言葉にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人や家族の希望があれば、新型コロナウイルスの感染対策をして面会や外出の機会を支援している。職員は、その機会を利用して日常生活の様子などを伝えて、家族の意向など確認している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設の小規模多機能ホームから入所した利用者があり、施設間の交流や自由な行き来が出来ている。家族や知人から手紙や贈り物が届いた際には、受け取った時の嬉しそうな表情を写真に残し、おたよりにして届けている。また家族以外の面会も再開し、馴染みの方と関われる時間も増えている。	利用者は友人、知人の面会や小規模多機能ホーム利用者との交流があり、玄関ホールで歓談している。合わせて小規模多機能ホームで週に3回行われている音楽療法に数名の利用者が参加している。また、家族と家の様子を見に外出される方もいる。小規模多機能ホーム勤務の理容師免許を持っている職員が2ヶ月に1回来訪してカットを行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者がお互いに気持ちよく関わり合い、支え合えるように、席を変えたりテーブルの位置を変更している。気の合う利用者が一緒に食事や入浴、レクリエーションや散歩など楽しんでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	季節の野菜や果物を届けてくれる家族や、近況を電話してくる家族の思いに添い、利用が終了しても、その関係を大事にしている。また過去に利用した家族が新たに利用申し込みをしたり、利用開始するケースがある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者のほとんどが、自身の思いや希望を伝えることが出来ている。日々の生活の中で会話を重ね、その思いを表出する機会となっている。表情や動作からも確認できている。職員は情報交換し、希望に添えるよう努力している。	殆どの利用者が意思表示ができ、職員の問い掛けに対して言葉や表情、仕草で表出している。日々の支援で気付いた事項はカード等書き留めて、カンファレンスの中で話し合っている。特出した事項は「にやりほっと」として毎月発行している「サンだより」の中で紹介している。合わせて日々の支援の中で気付いた言動等は、タブレットのケア記録に入力して、情報を共有するとともに出勤時や時間の空いた時に確認して、利用者個々の意向に沿った支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	サービスの導入時に家族や本人等から情報を得ている。趣味や暮らし方、生活環境、サービス利用の経過を把握している。日々の暮らしの中で教えていただくことも多い。また研修を通して家族から新たな情報を提供してもらっている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	タブレットを利用して、水分摂取量、排泄状況は確認しやすくなったため、心身状態を細かく把握できている。日々の生活の中で、できること、できないことを職員は情報共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画の作成はケアマネージャーが中心となり、利用者、家族から意見、希望、要望を確認している。ケアカンファレンス時に全スタッフの意見を確認して計画に反映している。緊急な対応が必要な場合には、状況に応じた計画に修正している。	3名の職員が3名の利用者を担当し、居室管理、消耗品等の補充を行っている。また、気付いた事はその都度話し合って意思統一を図っている。年1回「出来る、出来ないシート」を作成して、ケアカンファレンスの席上で発表している。また、カンファレンス時には、全スタッフが意見を出し合って、家族の意向も確認した上で、ケアマネージャーがケアプランを作成している。入所時は暫定で2週間のプランを作成。様子を見て3ヶ月、状態が安定している場合は6ヶ月のプランに繋げている。利用者に変化が見られる場合には、適宜見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアの実践の中で工夫したことや気づいたこと、次のケアにつなげたいことを記録に残している。タブレットや業務日誌に記録する他、申し送りを利用し、職員全員が共有している。特に食事の好き嫌いなどは表にまとめてすぐに確認ができるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者や家族からの要望は可能な限り対応している。認定調査の申請、受診の付き添い、不足品の購入など様々な支援をしている。併設の小規模多機能に出かけ音楽療法を楽しむ利用者もいる。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	職員は身近な地域資源について学ぶ機会を持ち、理解を深めた。かかりつけ医、歯科医がすぐに往診できるような体制も整えている。必要時には地域在住のOB職員がレクリエーションや食事作りのボランティアに来て		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は利用者や家族の希望で決めている。多くは利用開始前からのかかりつけ医を継続している。家族等からの依頼がある場合は、施設の協力医を紹介している。予防接種や症状の変化に応じて、受診の依頼や看取りの協力体制を整える等、かかりつけ医との連携に努め、支援に当たっている。	入所時に医療機関について希望を聞くとともにホームの取り組みについて説明している。現在、殆どの方が入所前からのかかりつけ医を家族と職員の送迎で受診している。若干名の利用者は、ホーム協力医を職員が付き添って受診している。また、常勤看護師が1名おり、日々の健康管理を行うとともに医師との連携を図っている。更に、併設の小規模多機能ホームにも看護師が1名在籍しており、緊急時等には連携を取るなど万全な医療体制を整えている。歯科は必要に応じて協力歯科医師の往診を受けている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は常に利用者の健康管理や状況の変化に対応している。職員は体調の変化に気づいた時には、ただちに看護師に報告している。併設の小規模多機能ホームの看護師の協力は支援を充実させている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院に際して利用者の情報提供をしている。スムーズな退院支援を、地域連携室や家族と連携を図りながら最大限努力している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期のあり方は、サービス導入時に本人、家族に確認している。また、その時々状況に応じての意向を確認して対応している。見取りを希望する場合は、主治医と連携して協力を受けられる体制を整えている。最後の時は家族等の見守りの中で迎えられることを念頭に職員一同で支援している。	重度化、終末期を迎えた時の指針が有り、利用契約時に説明して家族の意向もお聞きし同意書を頂いている。終末期を迎えた時には家族、医師、ホームで話し合いの場を設けて、家族の意向を確認の上で、医師の指示の下、改めて看取り同意書にサインをいただき医療行為をしない看取り支援に取り組んでいる。1年以内に2名の看取りを行った。好きだった洋服を身に纏っていたいたり、いつでも家族が面会が出来る体制を整えて心の籠もった看取り支援に取り組んでいる。合わせて、看取り後は振り返りの時を設けて経験を次回に繋げている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は、感染症の業務継続計画の内容を周知して、計画に沿って研修を行っている。AEDの点検を毎日行い、吸引機やAEDの取り扱い方を繰り返し学んでいる。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	職員は、災害時の業務継続計画の内容を周知して、計画に沿って演習して備えている。避難の際の危険個所の確認、非常時・災害時における備蓄品の見直しをしている。また、避難方法は、利用者の状況に合わせて出来るように訓練している。	年2回併設の小規模多機能ホームと合同で防災訓練を行っている。6月はボイラーからの出火を想定し、利用者全員が小規模多機能ホームへ移動する避難訓練を実施した。同時に通報訓練、地震を想定しての転倒物、落下物の点検、確認を行った。11月には消防署参加の下で、火災想定での消火訓練、「AED」の使用訓練、通報訓練を予定している。また、緊急連絡網が整備されており、スマートフォンの一斉配信機能を用いての訓練を定期的に行っている。「お米」「水」「缶詰」「介護用品」「発電機」等を備蓄している。	

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーに関わる時は周りに見えないように、聞こえないように話しかけている。職員は言葉かけや、対応について話し合い、お互いに注意して改善につなげている他、会議で学ぶ機会を作った。	言葉使いには気を配っており、気づいた時にはその都度職員同士で注意しあう様に努めている。また、トイレ介助にお誘いする時は耳元で話し掛け、他の利用者に分からないようにプライバシーに配慮している。呼び方は入所前に希望をお聞きし苗字か名前を「さん」付けでお呼びしている。入室の際には「ノック」と「失礼します」の声掛けと入室の目的をお話する様に徹底している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の多くは日常的に意思を伝えることが出来ている。思っていることや希望を話していただけるように会話したり、言葉で伝えられない場合は表情や動作から読み取るようにしている。誕生日には利用者の好みのメニューを取り入れている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	落ち着いた利用者に寄り添い、話を聞いたり散歩に出かけたりしている。施設の暮らしに基本的な流れはあるが、利用者のペースや、入所前の生活習慣も大切にしながら、希望に沿って見守りしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その日の気分で、自分で決めて身支度をしている利用者がいる。介助が必要な利用者にはどちらが良いか選択してもらい決めることもある。季節に合わせた衣類を選べるように、クローゼット内を整理する支援をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好みや苦手な物、食べれない物を確認している。個々の状況や希望に合わせて食べやすさやむせない対応をしている。食事介助が必要な利用者は姿勢に注意し、誤嚥防止に努めている。また、行事食や季節の果物、デザートを添え、見た目でも楽しんでもらえるよう工夫している。	ご自分で食事が取れる方が半数弱、一部介助の方が三分の一、全介助の方が若干名の状況である。昼食は利用者の希望も聞きながら、担当職員が肉、魚のバランスを考えた1週間分の献立を立て、ホームの畑で栽培した季節の野菜もふんだんに使って提供している。夕食の副食は配食会社の食材を利用しており、ご飯と汁物をホームで調理している。また、正月には「おせち料理」、クリスマスには「チキン」、お盆には「天ぷら、ソーメン」、七夕には「ちらし寿司」、お彼岸には「おはぎ」等の季節の料理も楽しんでいる。また、今年は小布施町に「ジェラートアイス」を食べに出掛けたがこれからは計画を立て、コロナ前の様に「回転寿司」「ラーメン」等に出掛ける計画を立てている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の食事量や水分摂取を把握している。利用者の好みや習慣、食べ方の状況によって、ミキサーにかけたり、ムース食、とろみ剤を利用している。食器や盛り方を工夫し安全に、食べやすいよう支援している。また食事形態の工夫や姿勢を保ち誤嚥をしないケアを行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは義歯の洗浄も含めて、利用者の出来ない部分を補うようにしている。歯ブラシ、くるりナブラシ、歯間ブラシなど状態に合わせて使用している。歯の治療は利用者の状況により、歯科医の往診が出来る体制を整えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	現在の利用者は全員トイレでの排泄が出来ている。支援の必要な利用者は、その行動や排泄パターンの確認により、トイレでのタイミングの良い排泄につなげている。	排泄は自立が若干名、一部介助が三分の一、全介助が三分の一強の状況であり、全利用者がトイレを利用している。職員は利用者個々のパターンを把握しているが、起床時、おやつ時、食事前、就寝前の定時の声掛けを行うとともに様子を見ながら早めにお誘いしている。また、状況はタブレットの中の排泄表に記録として残して情報共有に努めている。また、朝食にバナナや牛乳の摂取を進め、お茶を中心にした1日1000cc以上の水分摂取による排便促進に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取は一日を通して不足しないように心掛けている。また朝食にバナナを取り入れたり、おやつには牛乳などの乳製品を提供している。排便の確認および記録と下剤の調整をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は利用者の希望を確認して、気分や体調に配慮して行っている。清拭、シャワー浴、洗髪など状況に応じた支援が出来ている。入浴支援に時間と複数の介護者が必要になり、全員が毎日入浴することは出来ないが、利用者の希望に配慮して支援している。入浴の声がけに嫌がる利用者も湯に入れば喜ぶので、一度断られても時間をおき、すすめている。	見守り介助の方が若干名、介助が必要な方が四分の三強の状況である。基本的には週3回入浴を行い皮膚にかゆみの有る利用者には毎日入浴も対応する様にしている。入浴拒否の方が若干名いるが時間や人を変え対応している。また、「菖蒲湯」「ゆず湯」「バラ湯」等の季節のお風呂も楽しんでいる。また、今年は紅葉見物も兼ねて足湯に出掛ける計画を立てている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	自由な休息の時間が過ごせるように利用者の希望に沿って支援している。室温などの室内環境や寝具の調節と清潔に配慮している。夜間は室内の明かりをつけたまま就寝している利用者がある。利用者の希望に合わせて安眠を支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の利用者が服用している薬の説明書はファイルにまとめて、いつでも確認できるようにしてある。服薬状況、薬の変更や追加は記録して全員が確認している。誤薬の危険性に対応して、声出し確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ホール内のモップ掛けやテーブル拭き、ちり紙、新聞たたみを手伝う利用者がある。またガーデニングが好きな利用者には、花植えする機会を作り、水やりも行っていたが、気温の上昇の影響もあり、継続は難しかった。食堂ホールではYouTubeを利用して好きな動画を楽しんでいる姿がある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	熱中症の危険がない時期には、施設の庭の散歩を楽しんでいる。また、入所前から定期的に出かけていた場所に、家族の力を借りて今も外出している利用者がある。	外出時は自力が若干名、多数の方は車いすを使用している。天気の良い日にはホームの周りの果樹園を見ながら散歩したり、庭のベンチでお茶を楽しんでいる。春は花壇に全員で花を植え、水やりをしている。季節に合わせた外出も再開されており、春は臥竜公園に花見に出掛け、夏には小布施町にドライブを兼ねて「ジェラートアイス」を食べに出掛けた。今後は、足湯に出掛ける計画を立てている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を自分で管理して姪に小遣いを渡すことを楽しみにしている利用者がいる。お金の心配をしている利用者には、家族に協力してもらい、説明している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ひ孫や遠方の家族から届く手紙を嬉しそうに受け取る姿がある。心配事がある利用者には希望に添い電話で家族と話ができるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂ホールは多くの利用者が一日の大半を過ごしている。天窓からの陽の光が明るく、裏庭が広がり、開放感のある空間となっている。ウッドデッキでくつろいでいる猫の姿を窓越しに楽しむため、ホールに顔を出す利用者もいる。干支や手作りの四季の壁画を飾っている。ベッドにもなるソファで居眠りや休憩をしている。	玄関を入るとゆったりとした広さが確保されたホールがあり、ホーム行事や運営推進会議の会場として利用されている。一日の大半を過ごす食堂ホールは天井が高く開放感が漂い、正面に大型テレビが設置され、寛ぎのスペースが確保されている。ホール入り口の掲示板には利用者ひとり一人がオアシスの家族として写真入りで紹介されている。また、壁には春夏秋冬を現した見事な作品等が飾られ活動の様子が窺える。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールで過ごす席は、気の合う利用者が出ただけ一緒に過ごせるように、また利用者の希望に配慮しながら、テーブルの位置を決めている。利用者間での関係で席を替える時は、カンファレンスで話し合い決めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には家族と相談して、馴染みのある家具を置いている。家族との思い出の写真も飾ってある。好きなスポーツをラジオで聞いている利用者がいる。思い思いの過ごす場所になっている。	掃除が行き届いた居室は、十分な広さが確保され、大きなクローゼットと洗面台が完備されている。持ち込み物は自由で家族と相談の上で、イス、テーブル、時計、テレビ等が持ち込まれている。家族等の写真に囲まれて思い思いの生活を送っている様子が窺える。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者が安全で使いやすいように、各居室、廊下、浴室、トイレに手すりを設置している。ベッドから居室を出るまで安全に歩行できるように、立ち上がりバーを工夫して置いている利用者もいる。車椅子の運転を妨げないように、障害物となるテーブルや椅子の位置に配慮している。		